

505

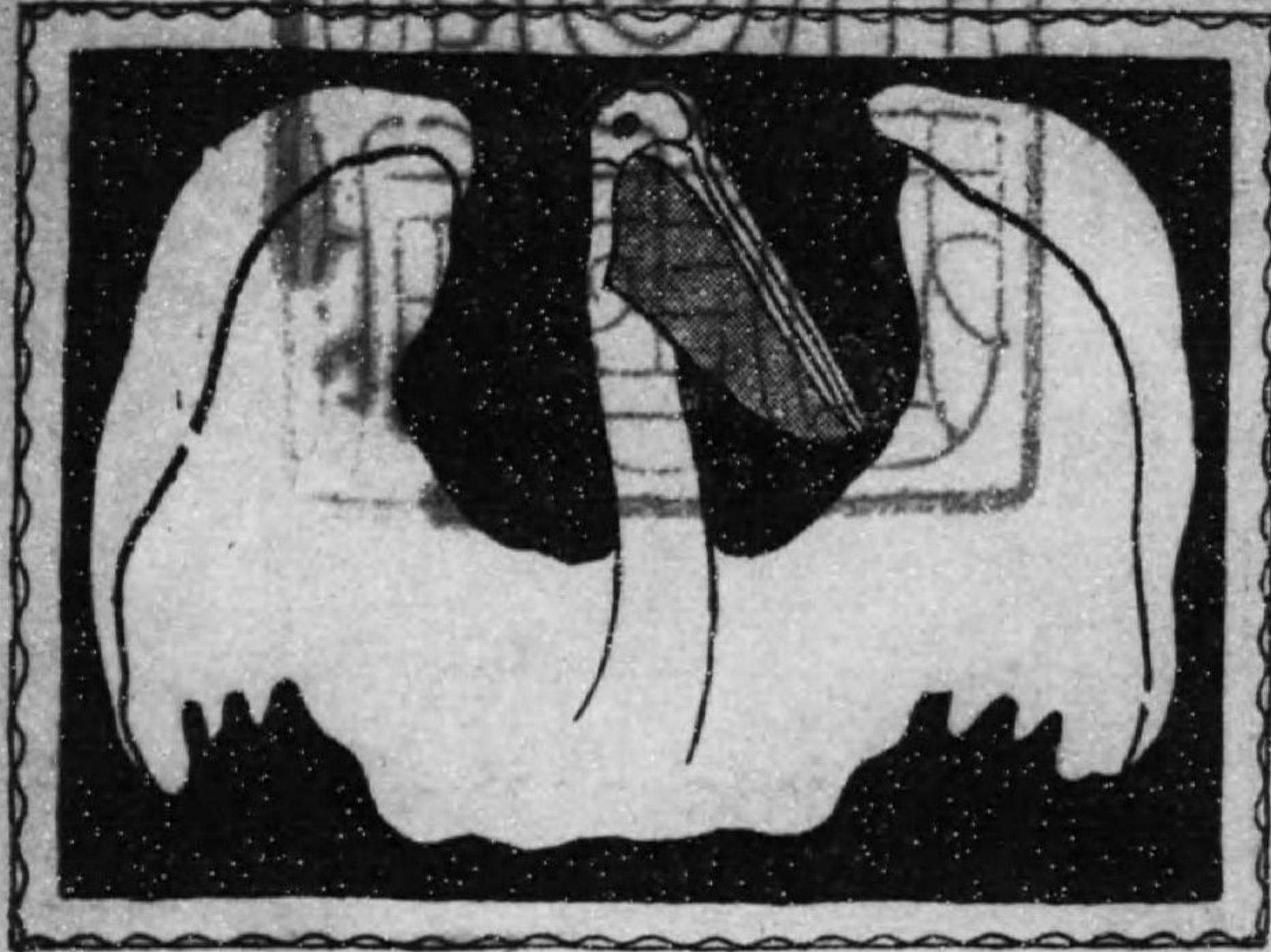
8

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{19/m} 1 2 3 4 5

始



505-8



童話新集
狐の恩返し
順三郎作

童話

雷の七道具

道具を擔いだ

雷さん

太鼓を叩く

ゴロゴロ

鏡を打ち振る

ピーカピカ

團扇をあほぐ

風ビュービュー

順三郎作



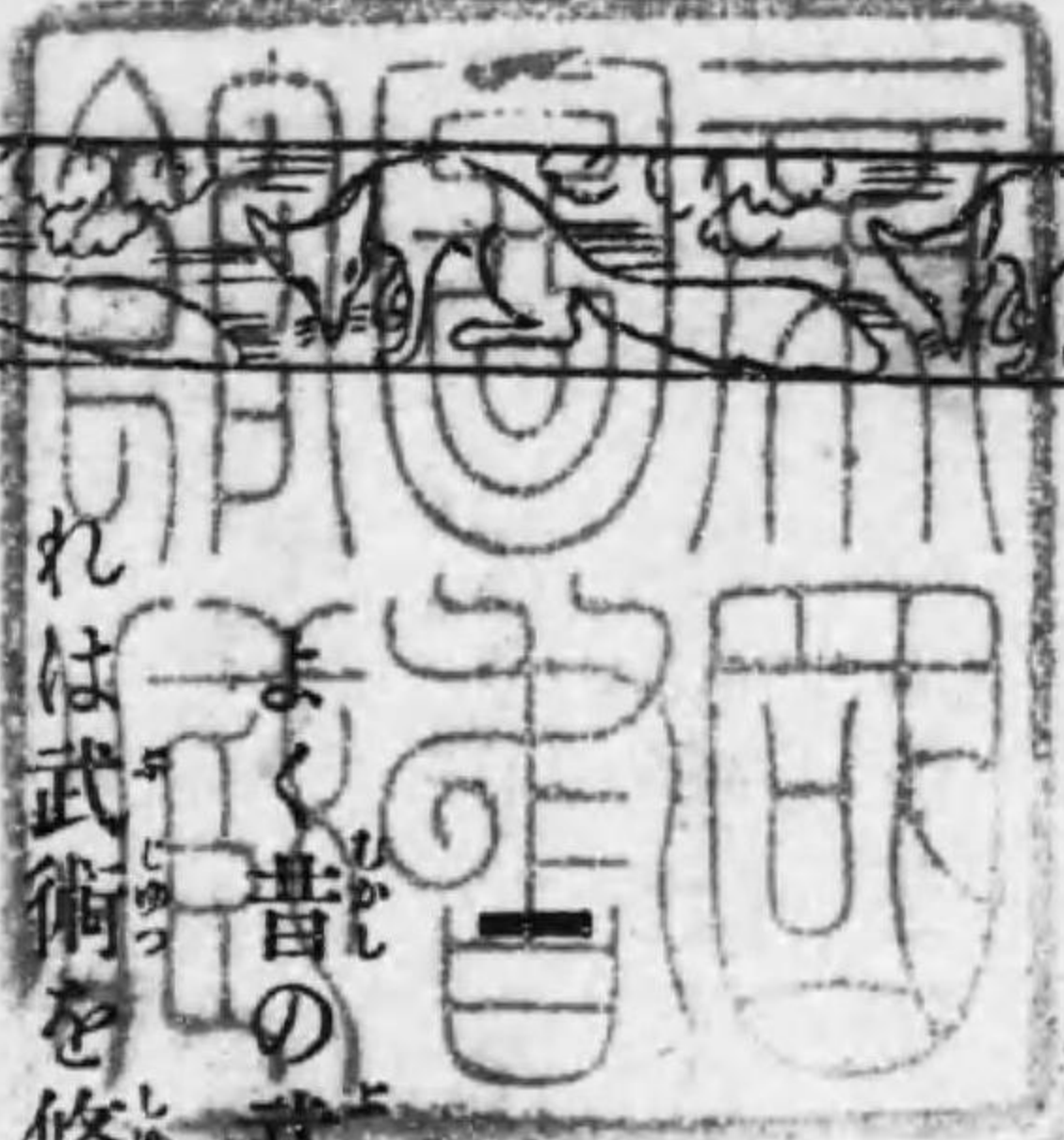


雷の七道具



見出

- 1 吝嗇修業 (頁二)
- 2 鬼の寶物 (頁二三)
- 3 石切職人 (挿書) (頁二五)
- 4 狐の恩返し (挿書) (頁三三)
- 5 小僧の智慧 (頁四五)
- 6 龜のお使 (挿書) (頁五三)
- 7 三人泥棒 (頁六五)
- 8 正直な娘 (挿書) (頁七二)
- 9 悪戯息子 (挿書) (頁八五)



新童話 狐の恩返し

順三郎 著

客 齋 修 業

まぐ昔の武士は、武者修業といふことをしました。これは武術を修業しなければ、立派な武士になれなかつたからです。今の人は學問を修業しなければ立派な人には成れません。

音 齋 修 業



- 10 花子の夢 (頁九三)
- 11 蟲の教訓(挿書) (頁一〇二)
- 12 雷の七道具(口繪) 頁一〇九
- 13 着物道樂(挿書) (頁一二〇)
- 14 象の仇討 (頁一三五)



修業と云ふのは、何でも其道のことを一生懸命に勉強したり、見たり、聞いたりすることです、學問にもいろいろありますけれども、法律、醫學、語學、商業、工業、理學、農業、みんな修業をしなければ覚えられません、女の子ならば裁縫の修業も大切なことです、お料理の修業も無駄なことではありません、編物とか、細工物とかいふやうなものも、覚えてゐて悪いことはありません、世の中は修業で持つてる位なものです、もつとも泥棒や嘘つきの修業は不可まません、悪戯の修業なんかも悪いことです、



吝嗇修業なんて、ずい分變てこなことを考へた男がありました、いつくら世の中のこととは、一から十まで修業だからといつても、吝嗇修業なんて、ずい分奇怪な修業です、然し、こんな變てこな、奇怪なことを考へるものは日本にはありません、これはドイツの國のことです、ドイツなんて國は、一体人間がどいつもこいつも奇怪なものばかり揃つてゐるのでせう。

この吝嗇小僧は、ドイツの田舎にゐました、ずい分吝嗇でした、出すものは舌を出すのも、ポケットから手を出すのも厭だつて言ふ位の吝嗇でしたが、ドイツの都の



ベルリンと云ふところには、もつごく有名の吝嗇先生が
住んでゐるご云ふことでしたから、ひとつ、この先生の
教を受けて、吝嗇坊の修業をして、もう少しゑらい吝嗇坊に
ならうと思ひ立ちました。

さて、旅仕度をして伯林の都へ來ました、吝嗇先生の
家を探しましたが中々見付りません、一日足を棒のやう
にして、水を飲み飲みお腹をふさいで探し歩き、やうや
うのことで塲末の町外れの、汚ない家に住んでゐたのを
見つけて、

「御免下さい、吝嗇先生の御宅は此家ですが。」



と、聞きますと、中から出たのが、四十五六の、髯も
ちやの先生、湯にも入らないと見えて手足が眞黒に光つ
てゐます、

「あなたは誰ぢや。」

「私は田舎からはるく参りましたが、先生は吝嗇の大
家とうけたまはりましたものですから、私も、先生の御
教授を受けて、立派な吝嗇坊になりたいと思ひます。」

「なる程く、それは感心な心がけぢや、聞けば世の中
の成金とか云ふ先生草履の中へ金の板をいれたり、御
婚禮の費用に二十萬圓もかけたりすると云ふ贅澤になつ

てゐるのに、吝嗇の修業をしたいと云ふのは中々感心な
ことぢや。

「では、教へて下さいませうか。」

「教へてやりますとも、教へてやりますとも。」

「有り難う御座います。」

「だが、今晚は折角御入來下すつたのでもあるし、御腹
も空つてゐるだらうから、何か御馳走いたしませう。」

「へい、どうも御馳走様。」

「いや、まだ御禮にはちと早い、どうです、散歩か
たく、町へ買物に出かけやうぢやありませんか。」



「結構で御座います、御供いたします。」

有名な吝嗇先生の御馳走はどんなものだらうと思ひな
がら、田舎者は先生のあとに従いて町へ行きました、先
生はあるパン屋の前へ来て、

「上等のパンは無いか。」

と、聞きました、さては上等のパンを御馳走して呉れ
るのかと思つて、田舎者は腹をヒクヒク咽喉を鳴らして
ゐますと、パン屋の番頭さんが、揉手をしながら、

「左様で御座います、バターのやうな柔かい上等なパン
が御座います。」





と、答へました、先生は田舎者に、

「して見ると、パンよりもバターの方が上等らしい、どれ／＼バター屋へ参りませう。」

と、パン屋では何にも買はず、二三軒先さきのバター屋へ行きました、パン屋の番頭は變な顔をして見てゐました、さて、バター屋へやつて来て、

「おい／＼、われたちはバターが欲しいのだ、上等のバターが。」

と、聞きました、バターやの小僧さんが、

「はい／＼御座います、上等も上等、丁度欖橄油のやう



な極上等のバターが御座います、え、如何ほどさしあげませう。」

「は、なるほど、それちや油の方が上等なんだな、よし／＼、それちや君に油を御馳走するとしやう。」

と、言つてバターを買はずに出かけました、バターやの小僧、バターを嘗めたやうな變な顔をして驚きました、二人は油屋へ行きました、

「おい、上等の油が欲しいのだ。」

「へい／＼油は何にいたしませう。」
と、油屋の主人が言ひました、

「上等の油だよ。」

「へい、上等の油ですかい、それぢや水のやうに透き通つた最上等の油をさしあげませうか。」

「は、あ、して見ると水の方が上等だと見えるな。」

と、吝坊先生はブイと油屋の店を出かけました、油屋の主人は變な顔をして、

「おかしな奴らだ、フフン。」

と、鼻で笑つてゐました、

そこで吝齋先生は田舎者を家へ連れて來ました、水道の栓を捻つて馬穴に一ばい其所へ出して、



「どうも方々訊いて見るのに、パンの上等なのはバターのやうだつて言ふし、バターの上等は油のやうだつて言ふし、油の上等は水のやうだつて言ふから、考へて見ると水が一番上等な御馳走のやうだ。そこで今晚は水をウンと御馳走するから遠慮なく召し上つて下さい。」

と言ひました、田舎者は大層感心して、

「なる程どうも恐れ入りました、私もおかげ様で大層よいことを習ひました、はるく修業に來た甲斐があつて田舎へよい土産が出來ました。」

と、厚く御禮を述べ、御馳走の水をタラ腹呑んで、そ



の晩のうちに田舎へ歸つて行きましたとき。

二 鬼の寶物

孝太郎は大層情深い、正直な子供でした、お父さんやお母さんの言ふことをよく訊き、まことに温順しいので近所でも評判の褒められものでした。

あるとき、山へ薪木を取りに行きましたがお仕事に氣をとられて日の暮れるのも知らないでゐました、歸らうと思ひますと、もう暗くなつて來たので、びつくりして急いで戻りましたが、どうしたものか道に迷つて、方角



も分らなく成りました、仕方がありませんから、草の上に座つて、いろいろの神様や佛様の名を言つて拜んでゐました、すると、はるか向ふに燈火がちらちらと見えました、孝太郎はその燈火をたよりにだん／＼行つて見るご、一軒の草葺の家がありました。

『日が暮れて、道に迷ふた者ですが、今晚お泊めなすつて下さいまし。』

と言つて頼みますと、中から出て來たのは年老つたお婆さんです。

『それは／＼可哀想に、さあ中へお入りなさいまし。』

と言つて中へ入れ、晩の御飯をご馳走して、さて寝るときになると、

「わたしの家は、毎晩のやうに鬼が来て二階でお金を分けたり何かしますが、明方になると、みんな又出て行きます、うつかりすると鬼に食はれてしまひますから氣をおつけなさい。」

「鬼が出るのですか。」

と孝太郎はびつくりしましたが、もう夜中ではあるし道は分らないし、仕方がありません、お婆さんは篋を出して、



「然しこのみのを着て二階の隅の方で寝て御入來なさい左様すれば大がい大丈夫でせう、そして東の空の明るくなる時分にみのの裾を叩いて、鶏の啼き聲を眞似してご覧なさい、そうしたら無事に歸れるかも知れません。」

「どうも有り難う。」

と、孝太郎は教へて貰つた通りみのを着て、二階の隅の方で寝てゐました、

やがて間もなく、表の方が騒がしくなつて來ました、そして青いのや、赤いのや、黒いのや、いろ／＼の鬼が大きな鐵の棒を下げて入つて來ました、孝太郎は呼吸を



殺して目をつぶつてゐました、

『婆さん、今夜は大分人臭いな。』

と、鬼が言ひました、婆さんは笑ひながら、

『そんな事があるもんですかこんな山の中へどうして人が来ませう、ちがひますよ。』

と、言ひ譯をしてゐました、

『左様かなあ、どうも人臭いやうだが……。』

『お鼻がどうかしてるのでせう。』

『さうか鼻のせいかな。』

と言つた儘、やがて鬼どもは丸くなつて座り、お金を



分けはじめました、そのうちに東の方がほのぼのと明るくなつて來たと見えて、戸のすき間から白い光がさし込んで來ましたから孝太郎はみのの裾をバタ／＼と叩いて、

『コケツコー、コケツコー。』

と、鶏の聲を眞似ました、

すると鬼どもは驚いて立ちあがつて、

『おや／＼、もう夜があけたぞ、こりや堪らぬ。』

と、あわてふためいて、そこに散亂かしたた金は其の儘にしてをいて、どや／＼と、外の方へ出て行きまし





た、
 孝太郎はあとでそのお金をかき集めて貰ひ、歸る道を
 教へて貰ひ、家へ歸りました、家ではお父さんもお母さ
 んも心配してゐましたが、孝太郎が無事に歸つたのを見
 ると、涙を流して喜びました、そこで孝太郎は昨夜の話
 をしてお土産の金を出して見せますと、お父さんもお
 母さんも大喜びです、
 『これと云ふのも、みんなお前が温順しいから、神様が
 ご褒美を下すつたのだらう。』
 と、うのお金を戸棚へしまつてをきました、此の様子



を、隣に住んでゐる角次郎と云ふ子供が見つけた、
 『孝太郎さん、どうして其様にお金を儲けて來たので
 す。』
 と、訊きますので、孝太郎は隠さずに昨夜の話をして
 聞かせました、
 『ちや、私も行つてお金を貰つて來やうかしら。』
 と、角次郎は言つて、仕度にごりかゝりましたから、
 孝太郎はとめて、
 『およしなすつた方がいゝでせう、お金が要るなら、こ
 れを半分に分けてあげますからおよしなさい、これはほ

んの神様の御助けで、二度と再びあることではありませ
ん。』

と言つて親切にさめましたが、慾ばり角次郎は、構は
ないで出かけて行きました。

孝太郎に訊いた通り、山の中で日を暮して、四方を見
まわしますと、遠くの方に燈光が見えましたので、その
あかりをたよりに行きますと、山の中の一軒家へ出まし
た。

『日が暮れて、道に迷つたのですが今晚とめて下さい。』

『あゝ、左様ですか、ここは鬼の宿ですが、それでもよ

ければ御泊りなさい。』

ご、婆さんが出て言ひました。

『ね、よう御座いますとも、私は御馳走は要りません
から、みのを貸して下さい、そして二階のすみへ寝かし
て下さい。』

『ちや、左様しなさい、だが、夜の明け切らないうちに
鶏の聲を眞似ちや不可ませんよ、若しか時間が早いと、
飛んでもない酷い目に逢ひますから。』

ご婆さんは念を押しました。

『承知しました、承知しました。』

と、角次郎はろく／＼婆さんの言ふことを耳にも入れないで、みのを着て寝ました、するさ夜中に、果していろ／＼な鬼がやつて來ました、

『來たく／＼。』

と、みのをかぶつて寝てゐますと、

『人臭いぞ、人臭いぞ、婆さん今夜も人臭いやうだな。』

と、鬼は鼻をヒク／＼させながら言つてます、婆さんは去りげない風で、

『何の人臭いことがあるもんか。』

『人臭い人くさい、婆さん何所へ人をかくしとくんぢや



無いか。』

『そんな事があるもんか、お前さんの鼻のせいですよ。』

『やつぱりおいらの鼻のせいかな。』

『そんな事より、早くお金をわけてお仕舞ひなさい。』

と、婆さんに言はれて、鬼どもは、やはり昨夜のやうに丸くなつてお金の勘定をはじめました、

お金の音がちやらく／＼します、角次郎は欲しくつて欲しくつて仕方がありません、咽喉から手が出るやうですとう／＼夜あけまで待ち切れないで、

『コケツコー、コケツコー。』



と鶏の啼く眞似をしましたが、みのを叩くのを忘れま
した、すると鬼どもは、

『こんな暗いのに鶏の啼くわけはない。』

『第一羽叩きの音がしない。』

と、どや／＼とところ中を探しあるき、とう／＼角次
郎を見つけてました、

『御免なさい／＼。』

と云ふのを耳にも入れず、よつて集つて角次郎を食べ
てしまいました。



三 石切職人

北アメリカのロツキー山の麓に、一人の石切職人が住
んでゐました、物に飽きやすい性質で、また至つて負け
ぎらひの威張りやさんでした、あるとき、

『こんな賤しい石切職人で一生を送るのは詰らない、人
に生れた甲斐がない、是非とも役人になつて威張つて見
たいものだ。』

と思ひました、そこで勉強して役人になりました、罪
もない百姓を脅したり、車に乗つたり、汽車に乗つたり





して威張つてましたがいつくら役人でも、郡長さんには叶ひません、いつも郡長さんに叱られます、

『ごうもこんな下役人では詰らない、ひこつ郡長さんになつて威張つてやりたい。』

と思ふやうになりました、そして一生懸命勉強して郡長さんになりましたから、もう大威張です、しかし豪いと思ふ郡長さんでも知事さんには叶ひません、いつくら下役人や百姓の前ではいばつても、知事さんには叱られなければなりません、

『よし今度は知事さんにならう。』



さう思つて、勉強をはじめたので、とうとう知事さんにまであがりました、下役人をこきつかつて、罪もない百姓を脅かしつけて、知事さんは面白い役でしたが、然し、大臣の前へ出るとへーへしてゐなければなりません、何でも大臣の命令によつて仕事をしなければなりませんから、うろ／＼詰らなくなりました、

『こんごは大臣にならう。』

ご、思ふやうになりました、そしてとうとう大臣に出世をしました、然し、その大臣も、大統領の前へ出ると小さくなつて命令を訊いてゐなければなりません、

『よし／＼今度は大統領だ。』

と決心しました、一生懸命勉強して大統領に選挙されました、アメリカには天皇陛下がありませんから、大統領ほど豪いものは無いのです、

さあもう大威張りです、地に行くには自動車に乗り、空に行くには飛行機に乗り、あまたの大臣や知事や郡長や、陸軍の大將などを自由自在に使つて、威張放題威張つてゐます、うまいものは食べ放題、いい着物は勝手次第、榮耀榮華にくらししてゐましたが、あるとき、大勢の家來をつれて野原へ遊びに出かけやうと思ひました、仕



度をして空を見ると、いつの間にか曇つて来て、どうやら雨が降りさうですから、とう／＼出かけられません、『こりや不可ない、いつくら大統領が豪くつても、た日様には叶はない、こんどはひとつ、お日様になつてやれ。』

と、途方もない考を起しました、

すると、不思議なものでさう／＼お日様になりましたやれ／＼もうおれより豪いものはない、天下一だと思つて威張つてましたが、考へて見ると、時々雲が出て来て邪魔をすると、お日様の光も通りません、





石切職人

『こいつあ不可ない、こんどは雲だ。』

と思ふと、こんどは不思議にも雲に化けました、思つた通り雲になつたので大威張である、風が吹いて来ました、西にとび、東に走り、風のために自由自在に玩具にされます、

『これちや駄目だ、雲が強いと思つたがとても風には及ばない。』

と、言ひますと、不思議や何時の間にか風に化けてしまひました、

廣い野原へやつて来て、早速吹いて吹いて吹きまくり



童話

石切職人

順三郎作

上見れば
何處までも
眼りの無い
ことせう
上見ぬやうに
心がけ
下見てみれば
大丈夫



石切職人

『こいつあ不可ない、こんどは雲だ。』

と思ふと、こんどは不思議にも雲に化けました、思つた通り雲になつたので大威張でゐると、風が吹いて來ました、西にとび、東に走り、風のために自由自在に玩具にされます、

『これちや駄目だ、雲が強いと思つたがとても風には及ばない。』

と、言ひますと、不思議や何時の間にか風に化けてしまひました、

廣い野原へやつて來て、早速吹いて吹いて吹きまくり



童話

石切職人

順三郎作

上見れば
何處までも
限りの無い
ことせう
上見ぬやうに
心がけ
下見てゐれば
大丈夫



ました、わがもの顔に吹きまくりました、くもは申すに
及ばず、木でも、草でも、手當り次第に吹きまくりまし
た、草でも木でも御免々々と御辭儀をしたり、横をむい
たりしてゐます、

「ヘン、如何だい、己様の強いことは、草でも、木でま
おれ様に叶ふものはありやしない、みんなヒヨコ／＼叩
頭をしてゐやがる、世の中にたれ程強いものはない。」

こ、大威張です、まつたくくもは意氣地なく吹きとは
され、草でも木でも、一とたまりもなく風の前に詫つて
しまひますから、いよく大威勢で、吹いて／＼行きま

すと、大きな岩石に打突りました。

『こん畜生、これでもかく。』

と、力一杯ふきました。が、岩石はビクともしません。

『こりや不可い、風より岩石の方が強いやうだ。』

と、こんどは岩石に化けました。こんどこそは一番強

いと思つてゐますと、そこへ石切り職人がやつて来て、

道具でもつてトンカンく打ちた、きますと、ころく

破壊れました。

『は、あ、やつぱり石切職人が世の中で一番強いのかも

知れない。』



ご、又もとの石切職人になつて仕舞つて、こんどは温順しく石切を勉強してゐました。

四 狐の恩返し

三吉は子供でしたけれども、たつた一人のわ母さんに

孝行をするために、毎日々々、山へ行つて兎や猿や雉子

や山鳥を取つて、それを町へ賣つてた金を儲けてゐまし

た、近所の人、三吉のことを、小獵師と言つてゐまし

た、

そんな風ですから、三吉の家は貧乏でしたけれども、

狐の恩返し



氣質の極くよい、正直な子供で、お母さんも中々善い人でした。

ある雪の多い冬のことでした、方々の山を歩つて鳥や獸を探しましたが中々見つかりません、キジをたつた一羽捕つたきりで、外には何にも取れませんでした。

『これちやお母さんに旨い暖かい肉を買つてやることも出来ない。』

と、心細く思ひながら歸らうとしますと、一疋の狐を見つけました、鐵砲をむけて打ち取らうとしますと、狐は三吉のそばへ寄つて來ました。



「三吉さん、わたしはこの村の稻荷様ですが、子供が澤山あるのに、雪が澤山降つて食物が見つからないで困つてます、御氣の毒ですが、そのキジを貰ふわけにはゆきませんか。』

と、言ひました、三吉は根が親切な子供でしたから、さう言はれると打棄つて置く譯には行きません。

『それではあげませう、だが他の獵師に見つかるかと討たれるから、氣をつけて御歸り。』

と言つてキジを狐に呉れてやりました、家へ歸つて母さんにその話をしますと、



『さうかい、それは善いことをしましたね、情は人の爲ならずと言つて、いいことをすれば、きつこい報があるものです。』

と、母さんも言ひました、

その翌日、三吉はまた山へ獵に出かけました、まだ雪の消え切らない時ですから、やつぱり澤山の得物はありませんでした、兎を二疋捕まへたきりで、他には何にも取れませんでした、鐵砲をかついで、兎を手につるし、歸らうとしますと、また狐に逢ひました、狐はお辭儀をして、



『三吉さんですか、昨日は有り難う、御かげ様で助かりました。』

『さうかい、そりやよかつた。』

『今日は兎を二疋お持ちですね、それを私に下さる譯にはゆきませんか、子供がな腹を空かして弱つてますから何分にもこの雪で、ちつこも食物が見つからないで困つてますかち……。』

と、狐は氣の毒さうに頼みました、

それを聞くと三吉も可哀想になりました、この二三日何にも捕つて行かないのですから、母さんにも申譯かな





情け深い
 子供さん
 子持の狐
 助けた爲め
 狐が恩を
 返さうと
 不思議な反物
 くれました

順三郎作



狐の恩返し

と思ひましたけれども、困つてる狐を見捨てる譯にも
 行きませんので、とうく二疋の兎を呉れてやりまし
 た、

『どうも有り難う御座います。』

と、狐はいく度もく御禮をいつて山の方へ飛んで行
 きました、

三吉は家へかへつて来て、お母さんにその話をしまし
 た、お母さんき情深い人ですから三吉の親切を褒めまし
 た、その翌日もまた、三吉は山へ獵に行きました、その
 日は山鳥を三羽捕りましたが、歸途にまた狐に逢ひまし



情け深い
子供さん
子持の狐
助けた為め
狐が恩を
返さうと
不思議な反物
くれました

順三郎作

狐の恩返し

童話



狐の恩返し

いと思ひましたけれども、困つてる狐を見捨てる譯にも
行きませんので、とうとう二疋の兎を呉れてやりまし
た。

『どうも有り難う御座います。』

と、狐はいく度もく御禮をいつて山の方へ飛んで行
きました。

三吉は家へかへつて来て、お母さんにその話をしまし
た、お母さんき情深い人ですから三吉の親切を褒めまし
た、その翌日もまた、三吉は山へ獵に行きました、その
日は山鳥を二羽捕りましたが、歸途にまた狐に逢ひまし



た、

「やあ、狐さん今日は。」

こ、こんどは三吉の方から聲を掛けました、

「昨日はどうも有り難う御座いました。」

こ、狐はピヨコ〜お辭儀をしながら、三吉の持つて
ゐる三羽の山鳥をちろ〜見えてゐます、

「これが欲しいのかい。」

「ええ、ですが餘り御氣の毒ですから。」

「いいや、上げるから持つといで。」

と、三吉は三羽の山鳥を狐に呉れました、狐は大喜び

狐の恩返し

で、

『どうも有り難う御座います、本當にたかげ様で助かります、この御禮には貴君が一生困らないやうにしてあげます。』

と言つて、山の方へ飛んで行きました、

斯うして毎日々々、狐に逢つては何かしら獲物をわけてやりました、唯さへ餘り金持でない三吉母子は、狐に半分ぐらゐづゝ獲物を取られたので、尙々貧乏ぐらしをしてゐましたが、それでもた母さんと二人で仲よく、楽しく生活してゐました。



やがて暖かい東風が吹いて来て、雪がだんぐゝ野山から消えて行きました、木の芽が萌え出し、草が生える頃になつて、三吉の家へ、十七八の色の白い、目のばつちりした美しくしい娘が来ました、そして、

『わたしは、此の村の稻荷さんです、この冬のうちは三吉さんのおかげで飢死もしないで、親子兄妹が丈夫で暮しました、何と言つて御禮を申上げていゝか分りません就いては何か御禮をさしあげたいと思ひますが、何にもありませんから、どうか私を女中がはりに使つて下さいまし。』



と言ひました。

「女中に使ひたくも、家は貧乏でお給金も出すことは出来なから。」

「お給金なんか入りませんから、是非、置いて下さいまし。」

「それぢやお在でなさい。」

それから、狐のばけた女中が三吉の家にあることになりました。その女中は、ずいぶんよく働きました。くるくる丸で高麗鼠のやう働き、よくお母さんの世話をしてくれましたので、三吉もお母さんも喜んでゐました。



「わたしは機織を織りますから。」

と言つて、その女中は用事のみまがあると、機械をこしらへて反物を織りはじめました。

それは、立派な反物が出来上がりました。何と言つていゝか分からないほど綺麗な美しい反物です。

「さあ、これで出来上がりました。それでは私は御暇をいたしますから、お母さんと三吉さんは、この反物を賣つて御金を儲けて下さい。」

と、狐の女中は言ひました。

「この反物を？」



と、母さんも三吉も、びつくりしました。たつた一反ばかりの反物を賣つても、大した金は儲からないと思つたからです。

『さうですよ、この反物はね、いつくら切つてもきつても失ならないのです、きればきるほご増えて行くのです。』

と言つたかと思ふと、女中の姿はかき消すやうに居なくなりしました。

三吉も母さんも、その反物をきつては賣り、きつては賣つて御金を儲けました。しまひには獵師をやめて、



呉服屋になりました。番頭や女中も大勢つかつて、お金もどん／＼儲かるやうになつたので、大層安樂になりました。これと言ふのも、みんな自分がよいことをしたからです。

五 小僧の智恵

あるお寺の和尚さんは、大層、自分勝手な、不親切な人で、自分さへ旨いものを食べ、よい着物を着てゐれば他人はどうでも構はないと云ふ人でした。

このお寺の庭に、一本の梨の木がありました。これ

小僧の智恵



は實に不思議な木で、毎年一本の木に五つか六つか實が結りません、そのかはりその實の旨いことと言つたら、それはく丸で頬邊も落ちる程です、ですから、和尚さんはこの梨の木を大切に自分で鳥を追つたり、虫を取つたりして、手入れをしてゐました、そして小僧には、

「この梨は、大層毒があつて、これを食べるとすぐに死んでしまふから、決して食べては不可いぞ。」と、云つて置きました、そして、秋になつて實を結びますと、その數を勘定し



てをいて、小僧にもがれないやうに氣を配つて居りました、

ある日のことでした、和尚さんは檀家に御法事があつて出かけました、留守をしてゐたお小僧さん、庭を掃除しやうと思つて出て見ると、その梨です、うまさうに、なつてゐるのを見ると、どうも食べたかつて仕方がありません、

「和尚さんは、毒だなんて云ふけれど、何が毒なところがあるもんか。」

と思ふと、そつと食べて見たくなりました、然し和尚





さんはちやんと數を勘定してをくのだから、ひとつでも打ち落して食べれば、すぐに分ります、
『食べたいなあ、だが食べたなら歸て来て叱るだらう、叱られるのも餘りうれしくはないからなあ。』
と、一旦は思ひとまりましたが、その大きなうまさうな色を見ると、よだれがだらく流れます、
『何、構やあしない、ひとつ打ち落して食べてやれ。』
と、長い竿をもつて来て、一番ちいさいのをひとつ、打ち落して食べました、その旨いこと！まつたく頬も落ちるかと思はれました。



『ちいさいのだつて斯なに旨いものだから、大きいのはさぞ旨味からう。』
と、こんどは、一番大きいのをたつき落して食べました、
『どうせ叱られるんだから、構やあしない、みんな食べてやれ。』
と、小僧はとうくみんな打ち落して食べてしまひました、
食べてしまつてから見ると、さあ大變！梨の木はからつぼうです、今更のやうに恐くなりました、いつも和尚

さんが食べてはいけなると云ふのを思ひ出すと、さすがに恐ろしくなつたのです、然し、もう仕方がありません、

『どうしやうかなあ、何とか旨い口實はないかなア。』

と、考へてゐましたが中々うまい口實もありません、

梨はうまかつたが、口實はまづい、いろ／＼考へてるうちに和尚さんが歸つて來ました、

『小僧や、今歸つたよ。』

と、言ふ聲かしました、

『さあ大變だ。』

と、大いそぎで駆け出す途端、和尚さんの大事にしてゐた急須をこわしてしまひました、

『やあ、また急須をこわした、困つたなア。』

と、その急須を袂へ入れた儘玄關へ飛び出して見ると和尚さんは居りません、そこらを見廻しましたが何所にも居りません、

その時和尚さんは、不斷大切にしてをく梨のことが心配になつて堪りませんから、お玄關から座敷へ上らずにその儘裏庭の梨の木の方へ行つたのでした、見ると、大事の／＼の梨がひとつもありません、葉がそこらにちら



かつてゐて、黒い種が、十も、二十も吐き出してあります。

「小僧々々。」

と、和尚さんは火のやうになつて怒り、大聲で呼びました、小僧はあわて、飛んで來ましたが、見るご泣いてゐます。

「これ小僧、お前だらう、この梨を食べてしまつたのは。」

「さうです、私です。」

「不埒な小僧だ、不屈きな奴だ。」

「何とも申譯がありません。」

と、小僧は袂からこわれた急須を出して、

「つい粗忽をして、お大事の急須を割りました、死んで御詫をするつもりで毒梨を打ち落して食べましたが、ひとつ食べても、二つ食べても毒が利きません、とう／＼みんなたべましたが、まだ毒が利きません。」
ご、言ひましたので、和尚さんはグウの音も出ませんでした。



六 龜の御使



龜のお使

龍宮の乙姫様が、ある時病氣にかかりました、醫者に
見せたところが、

「これは、日本と云ふ國へ行くと、猿と云ふ動物がある
から、その動物の生肝を取つて飲めば全快ります。」

と、言ひましたので、乙姫様は大喜び、すぐに龜を呼
んで、そのお使を言ひつけました、昔から龍宮の御使は
龜と決つてゐるのです、そこで乙姫様は、

「お前は、これからすぐに日本へ渡り、猿と云ふものを
連れて来て呉れ。」

と、言ひつけました、龜は、



童話

龜のお使

順三郎作

乙姫様の
言ひつけで
龍宮城を
出た龜が
猿を捕らうと
いたしても
なか／＼其の手に
乗りません



龜のお使

龍宮の乙姫様が、ある時病氣にかゝりました、醫者に
見せたところが、

『これは、日本と云ふ國へ行くと、猿と云ふ動物がある
から、その動物の生肝を取つて飲めば全快ります。』

と、言ひましたので、乙姫様は大喜び、すぐに龜を呼
んで、そのお使を言ひつけました、昔から龍宮の御使は
龜と決つてゐるのです、そこで乙姫様は、

『お前は、これからすぐに日本へ渡り、猿と云ふものを
連れて来てお呉れ。』

と、言ひつけました、龜は、



童 謠

龜のお使

順三郎作

乙姫様の
言ひつけで
龍宮城を
出た龜が
猿を捕らうと
いたしても
なか／＼其の手に
乗りません



「承知いたしました、きつと猿を連れて参りませう。」
ご、お受をいたし、早速日本へ参りました、如何かして猿を生捕りにしたいと思つて探しましたが、中々見付りません、その内にある林の、柿の木の枝に一疋の大猿が遊んでるのを見つけました、龜は大層よろこんで猿を呼びかけました、

「猿君猿君。」

「やあ、龜さんかい。」

など、云ふのを機會に、いろいろの話をしてゐましたか、その内に龜が、



「猿君！君は龍宮ご云ふ立派な所を見たことがあるかい。」

「いっやないよ、話には聞いてるけれども行つて見たことはないよ。」

「さうかねえ、繪で見ても美しくしいが、實際行つて見ると又格別だね、どうだい君、僕と一所に行つて見ないかい。」

「僕のやうなものでも行けるかね。」

「わけは無いさ、僕の背中に乗りさへすればすぐ行けるよ。」



「さうだね、君が連れて行つて呉れるならば譯はないなア、ごうかして一邊行きたいとは思ふけれども……。」

「ちや行かう。」
と、そこで猿は柿の木から降りて海岸へやつて來ました、龜は

「さあ君、僕の背に乗り給へ、僕がよろしいつて言ふまで目を閉ぢてる給へ。」

「ああ、ちや頼むよ。」

と、猿が龜の脊に乗ると、しばらくの間波をかきわけてゐましたが、間もなく、



「さあ、もういゝから目を開き給へ。」

と龜が言ひました、目をあいて見ると、金銀の寶で飾り立てた綺麗な御殿の前に来てゐました、

「やあ、もう来たのかい。」

「早いだらう。」

「素敵滅法に早いなだね、これちや毎日でも遊びに来た
いや。」

「今御殿を案内して見物させるから、ちよつと待つてゐ
給へ。」

と、言つて一室へ猿を待たせて置き龍宮の大臣役、鯛



の大膳へ猿を連れて来たことを申し上げました、やがて猿
は龍宮城の御殿へ召し出されました、

「猿を召し連れまして御座います。」

と、龜が猿を案内して来て、龍王の御前へ平伏しまし
た、

龍宮を見物させると言つたが、どうもこりや様子が奇
怪しいと、猿は内心ビクビクしてゐました、すると鯛の
大膳が、

「ウーン、噂に聞く猿ごは其の方か、どうも可笑な顔を
してゐる奴だ。」

「へい。」

「これ猿とやら、其方は生肝と云ふものを持つてゐるか。」

「へい。」

おかしな言を訊き出したぞと、猿どの少々考へはじめました、元來利口な奴ですから、タイの大膳や、ろの外の家臣たちの顔色を伺ひながら、

「生肝を何に遊しますか……。」

「さればちや、今度乙姫様が御病氣なので、薬用として召しあがらせられるのちやが、其の方生肝の持ち合はな



いか。」

猿めびつくりした、生肝といへば腹の中にあるのだ、それを取られりや死んでしまふ、どうも話が旨過ぎると思つたが、こいつあ一番失敗つた、たれのやうな利口者も一杯喰はされた、しかし斯うなりや逆も逃げられやうたつて逃げられやしないから、何とか工夫して鯛の大膳を欺さなくつちやならないと思つて、いろく考へてゐましたが、いゝ工夫もありません、

「どうちや生肝を持つてゐるかな。」

と、鯛は待ちかねてまた訊きました、





「はい持つてます、五つでも六つでも、乙姫様の御入用とあればいくらでもさしあげますが……」
「うれは感心な奴ぢや、早速その生贍を取りあげるから用意をしろ。」

「ところが……その生贍を持つて参りません。」

「何、生贍を持つて来ない。」

「はい、餘り今日はお天氣がよいものですから、腹から吐き出して洗濯して、木の枝へかけてをきましたところ龜どのが御入来になつたので、あわて、飛び下り、その儘木の枝へ忘れて参りました。」



「それは不都合千萬ぢや、生贍を忘れて来ては仕方がない、それでは龜の背にのつてその生贍を取つて来たらよからう。」

「どうか左様云ふことに願ひます。」

それではと言ふので、猿は再度龜の背にのつて日本國へ歸りました、陸へあがると、猿はその赤いた尻を叩きながら、白い齒をむき出して、

「此所まで御いで甘酒進上。」

と笑つてます、龜は驚いて、

「猿君、どうしたのだね。」



『何を言つてやアがるんだい、生肝なんかとられて御堪り小法師があるもんかい、生膽を取られりや死んぢまふぢやないか、猿を馬鹿にするは太い奴だ。』

と、そこにあつた石を拾つて、亀に打ちつけたので、亀の甲はめちやくくに破壊れました。

亀は口惜しくつて仕方がありませんが、如何することも出来ませんから、泣くく血まみれになつて龍宮へ歸つて来て、此の事を申上げますと、いづれも亀の忠義を憐れに思ひました、そして龍王は、

『お前が乙姫のために傷を受けたのは可哀想なことぢや



特に龍宮第一の傷薬を遣はすからゆつくり手當をするがよい。』

と言つて薬を與へました。

亀はその薬をつけたので、負傷はすぐに癒りましたがその傷痕は今に残つてゐます、亀の甲が六角の形になつてゐるのは、その傷のあとだと云ふことです。

七三人泥棒

三人の泥棒が、森の中の荒れ果た社祠を住家として、悪いことを働いて居りました、ある夕方、一人の商人が

森の前を通りかゝりました、

「来た。」

「彼奴を脅して金を取つてやらう。」

と、三人は隠し合せて飛び出し、刀を抜いて脅かしました、商人は慄え上つて恐れ入り、懐にあるだけの金を置いて、命からかく逃げて行きました、

「はゝゝ、いゝ按梅だつた。」

「さうよなア、こんな澤山お金の入つたことは近頃無いね。」

「どうだい、ひとつ今晚は御祝ひをしゃうちや無いか。」

「よからうく、お祝をしゃう。」

と、早速三人は相談を決めました、そこで籤を引きます、一番年若の男が、町へ酒やら肴やらを買ひに行くことに成りました、さて使に行つたあとで、残つてゐた二人は、見れば見る程澤山のお金ですから、慾心が出て來ました、

「どうだい君、この金を二人で配ければ三人で分けるよりもつと澤山、われゝの手に入る譯ぢやないか。」

「さうだなア、あの小僧ちつとも働かないのに、このお金を分けてやるのは惜しいものだ、それに二人で分れば





三人で分けるより澤山取れるんだから、どうだちう、彼奴が歸つて來たら、ひとつ刺し殺して終はふぢやないか。』

『それがいゝ、彼奴を殺してこのお金を山わけにしやう。』

と、二人の泥棒は、もといゝ悪いやつですから、こんな恐ろしい相談をして待つてゐました。

所が、使ひに行つた泥棒も、考へて見ると、いつも追ひ使はれてゐて馬鹿々々しい、あれだけ澤山の税金があれば一生安樂に暮らすことが出来るのだから、どう



かしてあのお金がみんな欲しいとかんがへました。

『そうだ、あの二人を殺してやらう、然し、おれは年も若いし力もないから、とても喧嘩は叶はないから、ひとつお酒の中へ毒を入れて殺してやらう。』

と、これも恐ろしいことをかんがへて、食物や酒を買つて來ましたが、その酒の中には恐ろしい毒をいれて置きました。

『おい、今歸つたせ、酒も上等、料理も上等なのを買つて來たぜ。』

と、言ひますと、二人の泥棒は顔を見合せて、



『さうか、そりや何うも御苦勞々々々。』

『まあ、そこへ荷物を置いて休んだらいいだらう。』

など、兩方から御世辭を言つて油斷をさせ、矢庭に刀をぬいて背後から切りかけました。不意をうたれたから堪まりません、あつと言ふ間もなく、倒れて終ひました。

『は、は、は、脆かつたなア。』

『意氣地のないやつだつた、まあこれで二人でお金が分けられると云ふものだ。』

『さうだ、まづ安心だ。』



『さあ、御馳走を食べやうかな。』

と、買つて來させた御馳走を並べて、酒を飲み始めました。

ところが、その酒には毒が入つてゐるから堪りません、

二三杯呑んでるうちに腹がちくちく痛み出しました、こりや變だと思つてゐるうちに二人とも血を吐いて、苦しみに悶いて死んでしまひました。

金を取られた商人が、町の警察に訴へて巡査をつれてこの森へ來て見たさきには、お金をそこへ置いた儘、三人の泥棒は血まみれになつて死んでゐました、悪いこと

をやるものは、みんな斯うした淺しい最期を遂げるもので、天の罰と云ふべきです。

八 正直な娘

米國の獨立戦争のときです、

獨立戦争と云ふのは、米國が英國の領分であつた時に米國の人々が、英國のやり方に我慢がしきれなくなつて反對の戦を起したごきのことを言ふのです、

その時のことでした、米國の知事をしてゐたグリズオルドと云ふ人が、今にも英國の兵隊に捕まりさうになつ



たので、急いで逃げて來ました、それは前々から、陸からは見えないやうに川岸にはえてゐる木の蔭に一隻の小舟をつないで置きましたから、その舟にのつて逃げるつもりで、川の方へ行かうとしますと、果樹園の中で、従妹のヘツチーに逢ひました、ヘツチーは今、園の草の上で麻布を擴げて、日光に晒してゐる所でした、そばには水をいれた手桶が置いてあつて、時々その麻布に水をふりかけて濕してやるより他に用がありませんから、ヘツチーは木の蔭で編物をしてゐましたが、垣を起えて入つて來る人があるので、びつくりして立ち上つて見ると、



それは従兄の 그리스オルドでした、

『あゝ、あなたですか、私、びつくりしましたの、何所へ被來やるのですか。』

ヘツチーは斯う言つて訊きました、ヘツチーはまだ十三になつたばかりの少女ですから、 그리스オルドが戦争から逃げて來たなどと云ふことを知りません、

『ヘツチーさん、今敵兵が私を探してゐる、私は敵の來ないうちに舟にのらなければ捕まつてしまふかも知れないからね、お前さん、海岸の方へ行つて敵に逢つて下さい、そうすると敵はきつと私のことを訊くから、その時



には、私が驛馬車にのらうとして此の道を上の方へ行つたと話してやつて下さい。』

と、 그리스オルドは急き込んで言ひましたが、ヘツチーは頭を振つて、

『そんなことは言はれやしませんわ、それは本當のことぢや無いんですもの、貴方はおいでになるところを私に言はなければよかつたのですのにね。』

『そんな事を言つて、お前さんは私を敵の手に落すつもりだね、あゝ、もう敵の馬の足音がする、さ、ヘツチーさん、私が此の道を上の方へ行つたと言つて下さい。』



「いゝえ、嘘は申されませんが、けれど、私、どんなに敵が私を苦しめて、たごへ殺されても、あなたが何所へ行つたと云ふことは申しませんから、早く、御逃げなさい。」

と言つてゐるうちに、馬の蹄の音が聞えて來ました、 그리스オールドは青くなつて、

「もう駄目だ、何所かへ隠れなければ捕つて仕舞ふ。」

「では、早く此の布の下へお入りなさい、私が麻布に水をふりまいてゐる風をして居りますから。」

「もう仕方がない、左様しやう。」



と、 그리스オールドは、すぐに、その麻布の中へ隠れました、麻布は澤山積んでありましたから、 그리스オールドの姿はすぐに見えなく成りました、そこへ騎兵の一隊が飛んで來ました、一人の士官がヘツチーに、

「お前は此所を駈けて行つた人を見たかね。」

「はい、見ました。」

「その人はどつちの方へ行つたか。」

「その事は、言はない約束をしましたから、申上げられません。」

「本當のことを、言はないと、お前のためにならない





正直な
世界のため
人だから
神さま
保護を
なされるから
立身出世
エラシなる

三郎作



正直な

よ。

『でも、約束は守らなければなりません。』

ヘッチーは何と言つても言ひませんでした。すると、その隊の中から一人の騎兵が出て來ました、これはヘッチーをよく知つてゐる人です。

『私が訊いて見ませう、私はこの少女を知つてゐますから。』

と、士官に申しますと、士官はこれをゆるしました、

騎兵は、

『お前さん、ヘッチーさんだね。』



正直は
世界のたから
人だから
神さま
保護を
なさるから
立身出世
エラクなる

順三郎作

正直な娘

童話



正直な娘

よ。』

『でも、約束は守らなければなりません。』

ヘツチーは何と言つても言ひませんでした、すると、その隊の中から一人の騎兵が出て來ました、これはヘツチーをよく知つてゐる人です。

『私が訊いて見ませう、私はこの少女を知つてゐますから。』

と、士官に申しますと、士官はこれをゆるしました。

騎兵は、

『お前さん、ヘツチーさんだね。』



と、言ひました、

「はい。」


「今此所を逃げて行つた人はお前さんの従兄のグリスオ
ルドだらう。」

「はい、左様です。」

「グリスオルドがお前のところへ来たときに、何か言つ
たかね。」

「捕らないやうに逃げるのだと申しました。」

「さうだらう、従兄は何所へ行かうとしてゐたかね、私
はそれ前の従兄と話したいことがあるんだがね。」



「従兄は小舟にのりに川へ行くのだと申しました、それから、敵に逢つたら驛馬車の方へ行つたと言つてくれと申しました。」

「さうかね、お前は實に正直なよい子だ、その時、お前さんは、従兄のためでも、嘘は言はれないと言つたらう。」

「はい、左様いひました。」

「それで従兄はどうしたかね。」

「その時従兄は、お前は私を敵の手に落すのかと言ひました、けれども、私は、たとへ殺されるやうなことがあ

つても、敵には言はないと言ひました。」

と、ヘツチーは涙ながらに言つた、

「さうか、それは中々感心なことだ、そのさき従兄は、お前に御禮を言つて、すぐに川の方へ、逃げて行つたらう。」

「いね、何所へ行つたかと云ふことは、言はないやうに約束をしましたから。」

「あ、さうく、さうだつたね、然し、従兄が一番しまひに何といつたか、それを教へてくれ、もうあとは訊かないから。」

「もう仕方がない、左様しやうと申しました。」

ヘツチーはわつと泣き出して、エプロンで顔をかくしました、騎兵はこれで十分わかつたと思ひましたから、馬を走らせて川の方へ行きました、

グリスオールドは、船の船頭と合圖が決めてありましたそれは、自分が危ふくなつたときには、隠れてゐる家の窓に、晝は白い布をかけ、夜は灯をつけると云ふのでした、ですから、騎兵が来て、ヘツチーと話をしてゐるのを見て、果樹園の中にあるヘツチーの家では窓に白い布をかけて、船頭に合圖をしましたから、船頭はすぐ川を



離れて海の方へ漕いで行きました、

ですから、敵の騎兵がヘツチーに訊いた通り、川岸へ駈けつけたときには、船はもう海の方へ漕ぎ出してありました、その船には船頭が二人乗つてゐましたから、騎兵は、グリスオールドが船に乗つてにげてしまつたものと思つて歸つてしまひました、騎兵が歸ると、ヘツチーは麻布の中からグリスオールドを出しました、

「ヘツチーさん有り難う。」

と、グリスオールドはヘツチーの手をとつて喜びました然し、ヘツチーは、



「いゝえ、私はたゞ正直を言つただけなのです。」
と言ひました。

本當に正直を言つたばかりに、敵の兵士は思ひちがひをして行きました、そのために 그리스オールドは危ふい所を助かつたのです、正直の頭に神宿ると云ふのはこの事です、 그리스オールドは、ヘツチーと一所に果樹園のなかにある、ヘツチーの家へ歸りました、そして窓にかけた合圖の白い布をとり去るこゝ、やがて沖の方から船が戻つて來ました、 그리스オールドはこんどこそ其の船に乗つて沖合はるかににげるこゝが出来ました。



間もなく戦争も終つて米國は獨立して立派な國になりました、 그리스オールドも立派な役人になりましたが、自分の生命を助けて呉れたヘツチーを永く忘れないために自分の女の子にヘツチーと云ふ名前をつけたと云ふことです。

九 悪戯息子

東京から程遠からぬ田舎に、一軒の金持の家がありました、屋敷が大層大きく庭も大分廣く、その庭には木が林のやうに生ひ茂つてゐました、庭のずつと奥には二三





悪戯息子

百年も経つたやうな松が十本ばかり立つてゐて、晝も尙ほ物凄いやうです、その松の下に離座敷が拵へてあつてこの離室はこの家の息子の居室になつてゐました、所がこの息子は、到つて悪戯好の子供でした、家にゐる女中に、頗る氣の弱い臆病な女があるので、これを利用してやらうと思つて、ある日、外の女中を呼んで、『どうだ、今夜あの臆病な女中を脅してやらうぢやないか。』

と、言ひますと、女中たちはみんな面白がつて、黄色い聲を出して賛成しました、



童話

悪戯息子

臆病女中

オドカンて

面白がつて

遊ぼうと

お化になつた

馬鹿息子

肩を切られて

怪我をした

順三郎作



悪戯息子

百年も経つたやうな松が十本ばかり立つてゐて、晝も尙ほ物凄いやうです、その松の下に離座敷が拵へてあつてこの離室はこの家の息子の居室になつてゐました、所がこの息子は、到つて悪戯好の子供でした、家にゐる女中に、頗る氣の弱い臆病な女があるので、これを楽しんでやらうと思つて、ある日、外の女中を呼んで、『どうだ、今夜あの臆病な女中を脅してやらうぢやないか。』

と、言ひますと、女中たちはみんな面白がつて、黄色い聲を出して賛成しました、



童話

悪戯息子

臆病女中

オドカシて

面白がつて

遊ぼうと

お化になつた

馬鹿息子

肩を切られて

怪我をした

順三郎作



「ヒヤ／＼、替成々々。」

「面白いわね。」

などと、手を叩いて踊りあがつて喜ぶ始末です、人を脅かして喜ぶなんて、まことに善く無い悪戯です、

「そこでね、僕が今夜あの離室にわざと小刀を置いて来るからね、それを、あの女中に取りにやることにしよう。」

「へエ、それで如何します。」

「それで、誰かお前たちがお化の姿をして行つて、途中で待つてゐて脅してやるのさ、どうだ面白からう。」

「面白う御座んすわね、でも、誰がお化になるんですか。」

と、一人の女中が言ひました、

「お前はどうかだ。」

「お、いや、恐いわ。」

「恐いつて顔はもう三寸ばかり長いわ。」

などと混つかへしてゐましたが、誰もお化になると云ふものがありません、仕方がありませんから、その悪戯息子が自分でお化になることに決めました、

その日、子供は夕方まで自分の居室で勉強してゐまし



たが、わざとナイフを忘れてかへり、十時頃になつて急に思ひついたやうな風をして、

「たい、お前おれのナイフを持つて来てくれ、あの、離家に置いて来たのだが、どうしても今入用なのだ。」

と、臆病女中に言ひ付けました、

「何ッ、あの離家?。」

訊いたゞけでもびつくりして仕舞つて、女中は頻りと詫言ひましたが、ごうしても許されませんから、思ひ切つて灯をつけて出かけて行きました、あたりは茫々としてゐて、風の音ばかりが物すごく聞えます、やうやく離家





へついで、机の上にあつたナイフを持つて出かけると、林の奥でフクロが鳴きました。びつくりして飛び上つた拍子に、持つてゐた提灯を落して灯を消してしまひました。さあ大變、あたりは眞暗になつて、一寸先も見えませんが、女中はしばらく途方に暮れてゐましたが、やがて夢中で飛び出しました。五六十歩も歩つて來ますと、さつと吹いて來た一陣の風に、何だかゴソ／＼と音がしました。

『アレツ、た化え。』

と、ギョツとして聲をあげました。まつたく大變です



白い着物を着て、髪を振り亂してゐる化ものが、ひよい／＼後から追ひかけて來ます。

『タ……タ……たい……へん……』

と、女中はろこへ打ち倒れましたが、化物はそばへ寄つて來て、女中の襟を冷たい手で撫でました。

『わツ、助けて下さい。』

と、言ふつもりだつたのですが、咽喉がこぼりつくやうで聲は出ません、とても助かれないと思ひましたから女中にもつてゐたナイフで、その化ものの肩を突きましました。

『痛つ。』

と、化物はそこへ打ち倒れました。

女中はもう夢我夢中です、その間ににげやうと思つてせいく言ひながら母家へ走つて来て、主人に化物が出たことを言ひました。

主人は何にも知りませんから、びつくりして提灯をつけて離家の方へ行きまよと、そこに倒れてゐるものがあります、よく見ると、それは自分の實子です、お化のかつらをかぶつて、白いきものを着て、ナイフで肩先をつかれて血に染つて倒れてゐました、引き起して仔細を訊いて見ると、悪戯子供のいたづらで、女中を脅さうと思つて、かへつて自分が肩を切られたことがわかりましたので、實子は大變に叱られました、そのかたの傷の癒る頃には子供もすつかりいたづらをやめて、温順しい子供になつたさうです、人を呪へば穴二つと云ふことがありません、餘り罪の深い悪戯をすると、いつか自分も人から苦しめられるものです。



一〇 花子の夢

花ちゃんは、京都の伯母さんからお正月のお年玉に、

花子の夢

押繪の綺麗な羽子板を貰ひました、それはく〜綺麗な美しくしいお姫様の押繪でした、お雑煮の箸を置くか置かないかに、

「御母さん、あたいの羽子板を出して頂戴な、ようお母さん、お母さんてばさ、京都の伯母さんから頂いた羽子板をさ。」

「あ、出してあげますよ、今、此の御道具を片つけてから出してあげますよ。」

「いやよ、く〜、早く出して下さいよ、早くでなくつちやいやよう。」



やつと八つになつたばかりの花ちゃんは、お母さんがお仕事をしてゐるのも構はないで、無理にせがんで羽子板を出して貰ひました、そして表へ飛び出して、おとなりの春子さんと羽子つきを始めました、

「大黒さまと云ふ人は、いイチに俵を踏まへて、いに莞爾わらつて、さアんに盃き手にうけてえ、よたつ世の中よいように……………」

と、唄ひながら突いてゐる拍子に、羽子板の表の、綺麗な押繪の、お姫様の顔にハネがゴツーン、

「あらく、あたし大變なことをしつちつたわ、春子さ



ん春子さん如何しませう。』

と、花ちゃんは泣き出しました、折角の大切のくくの姫様の顔が凹んでしまつたのです、泣きながら家へ飛び込んで来てた母様に、

「母さん、羽子板を悪くしました、お母さんてば、よう。』

「まあ悪くしたつて、如何したの。』

「あのね、押し繪のた姫様にハネがあたつて、綺麗な顔がくぼんでしまつたのよ、母さん、代りの羽子板買つて頂戴よう、ねえ母さん。』



「さうかね、おやくこれは大變なことをしたね、でもね、あとで母さんが直してあげるから今日はそれで使つておいで。』

「直してくれるの、ちや今直しておくれよ、よう母さん。』

「母さんはね、今忙しいのだから、もう少し経つてから直してあげるから、少し待つてらつしやい。』

「今直して頂戴よう、あとでなんか厭ですよう。』

「不可ません今は、母さんはお客様が来ていらしつて忙しいのですから、



「忙しいつたつて構はないわ、ねえ、今がいゝのよ、今直して頂戴よう。」

「あそこで直してあげますよ。」

と、仰有つたぎり、母さんはお客様の相手をしてるので、花ちゃんは口惜しまぎれに炬燵へ當つて泣いてゐましたが、そのうちに、グウ〜眠つてしまひました。

⇒(98)⇐

すると、誰やら花ちゃんを、呼ぶ者があります、おや〜と思つて起きて見ると、目のさめるやうな綺麗な人が立つてゐました。

「花ちゃん花ちゃん。」

「あたいですか。」

「えゝ、花ちゃんを呼んだのよ。」

と、言ふ顔をつくつく見ると、如何でせう、丸で羽子板の押繪にあるお姫様のやうです、花ちゃんは目を丸くして、

「おや〜、羽子板のお姫様のやうな、綺麗な姉ちゃんね。」

「えゝ、あたし羽子板姫よ。」

「あら……。」

⇒(99)⇐

「花ちゃん先刻、あたしの顔に、ハネを打突けたでせう。」

「え、だつて……わざとしたんぢや無いんですもの御免なさいよ。」

「ほ、ほ、何にもそんなに詫らなくもい、のよ、でもね、花ちゃん、お母さんに我儘を言ふもんぢやありませんよ、お母さんのたいそがしいごきには、温順しく待つてらつしやるんですよ。」

「だつて……。」

「是から我儘仰有ると利きませんよ、今度だけは勘忍し



てあげますからね。」

「え、あたし、もう我儘言ひません。」

「さう、よく分りましたね、花ちゃん御利口さんね、それぢや左様なら。」

「あらお姫様待つて下さいよう。」

と、袖をこめやうとするご、目がばつちりあいて夢がさめました、母さんが莞爾しながら、

「さ、花ちゃん、羽子板がなをりましたよ。」

と、羽子板を待つて来て下さいました、本當に元つ通りの綺麗な顔になつてゐましたから、花ちゃんは、





虫の教訓

「母さん有りがご、あたいうも、母さんに我儘言はないことよ。」

と言ひました、母さんは莞爾してゐらつしやいました。

一一 虫の教訓

姉さんの清子さんは、大變に温順しいよい子でしたが、妹の秀子さんは、大の學校ぎらひ、おまけに遊ぶことがすきで、なまけもので、ちとお轉婆さんでした。

ある秋の日、二人は朝から御辨當の仕度をして貰つて



童話

虫の教訓

頼三郎作

練さん嬢さん
お前ほど
呑気なものは
ありません
何んにもしないで
歌ばかり
歌ひ暮らして
どうするの



童謡
虫の教訓
蝉さん蝉さん
お前ほど
呑気なものは
ありません
何んにもしないで
歌ばかり
歌ひ暮らして
どうするの

順三郎作



虫の教訓

『母さん有りがご、あたいうも、母さんに我儘言はないことよ。』

と言ひました、母さんは莞爾してゐらつこやいました。

一 虫の教訓

姉さんの清子さんは、大變に温順しいよい子でしたが妹の秀子さんは、大の學校ぎらひ、おまけに遊ぶことがすきで、なまけもので、ちとお轉婆さんでした、

ある秋の日、二人は朝から御辨當の仕度をして貰つて



野原へ遊びに出かけました、何しろ秋の日和ですから、吹く風も大變に心持よく、空も晴れ渡つてゐて、氣も輕々とするものですから、二人は思はず遠くまでやつて來ました、枯れた尾花のそばに來ますと、何だかひそひそ話をしてゐるものがありました、

「おや、何だらう。」

と、そつと覗いて見ると、一疋のカマキリと一疋のトンボとでした。

「何とカマキリさん、めつきりお寒くなつたぢやありませんか。」



「本當にトンボさんの言ふ通りこれちや私たちの行末も長くはありませんねえ。」

「ご、心細げに話をしてゐるのでした、するとそこへまた一疋の蟬が、よぼくに着れた着物を着て、さも疲れだらしく飛んで來ました、

「あなた方は何をしてゐるのですか。」
と、訊きますととんぼが、

「これはく大蟬さんですか、私どもはめつきり涼しくなつたので、これから如何していゝかと思つて案じてゐるのですよ。」



「なる程さうですか、でも、貴君方はまだよう御座いますよ、私などは夏中何にもしないで歌を唄つて呑氣に暮してゐたものですから、ごらんなさい、秋が來てもこんな薄い着物一枚で、寒くつてく仕方がありません、身體は疲れて來るし、手足は利かなくなるし、たゞもう死ぬのを待つばかりですが、弱つてしまひますよ。」

と、ぼろく涙を流しながら言ひますと、カマキリが氣の毒さうに、

「然しね、大蟬さんなどはそれでも楽しく遊び暮してゐたのですからね、仕方がありませんよ、若いとき樂々と



何にもしないで遊び暮したのだから、今となつて苦勞するのには仕方がありませんよ。」

「本當に左様ですよ、人間の言葉にも樂あれば苦ありと云ふことがありますかね、これも餘り樂をしすぎた罰でせうよ。」

「樂は苦の種、苦は樂の種つてね、よく言つたものですよ。」

「然しもう、過ぎ去つたことは仕方がありませんから、こんど生れ變つて來たら、怠けないでよく働きませうよ。」



と、蟬が云へばトンボも、

「本當に、これからは氣をつけませう。」

と、破れた羽を揃えて、トンボと蟬は何所もなく飛んで行きました、するとカマキリも思ひ出したやうに首をもちあげて、

「ごれく、私も出かけやうか。」

と、これも何所ともなく、とんで行つてしまひました、

是を見てゐた秀子さんは、感心したやうに姉さんの清子さんに、



「姉さん、私たちも怠けてゐたら、あの蟬やトンボのやうに後末に苦勞しなければならぬのですね。」

と、言ひますと、清子さんは、

「そうですね、本當にた前はいい所へ氣がつきました、さあ、今日からはすつかり入れ替えて、しつかり勉強なさいよ。」

「え、きつと勉強するわ。」

と、秀子さんは心から聲を出して言ひました、清子さんは嬉しそうに、

「それでは、もう歸りませう、今日はいいい日でしたね。」



「本當に、ねえ。」

と、秀子さんはしみじみ言つて姉さんの顔を見ました、二人は袖をつらねて、楽しさうに笑ひながら家の方へ歸つて行きました。

一二 雷の七道具

太郎と次郎は、兄弟つれ立つてた城の山から日の出を見やうと言つて、霧深い草を踏みわけて登つて行きました、やうく山の中程まで來ると、何所だか遠い方からゴウウくと云ふ大變な駈の聲がします、



「やあ、兄ちゃん誰か寝てゐるよ。」
 「本當だね、鼾が聞えるね、誰だらう、ちよつと覗いてやらう。」
 「あたい、此方から行つて見やうか。」
 と、次郎はもう駈け出しました。
 「不可いよ、次郎さん一人で行つちやはぐれるよ、そんなにドン／＼駈けると目を覺ますよ。」
 「あいよ、ちや兄ちゃん先にたいで。」
 「そんなに大きな聲を出すんちや無いよ。」
 と、言ひながら、大きな櫛の木の下まで來ました、二



百年も三百年も経つたと思はれるやうな櫛の木の下の、そつとのぞいて見ると、恐ろしい怪物が、眞赤な毛もくちやらの、足を投げ出して、大きな太鼓を枕にして寝てゐました。
 「やア、大變だ／＼。」
 と、太郎と次郎は一生懸命ににげ出しました、何だか木の根に突き當つたと思つたら、それは怪物の手だつたのです、さあ、恐いこと／＼、次郎はわつと泣きまじ

「何だ／＼、蚊が泣いてるのか。」



と言ひながら、怪物は目を覺ましました、可愛い子供が二人して泣いてるので、急にやさしい聲を出して、
「わい、坊ちゃん方、泣かなくもい、よ、此所へおいでた話をしやう。」
と言ひました、太郎も次郎も、安心してその傍へ寄つて行きました、すると、怪物も莞爾しながら小山のやうな身體を丸くして座り、
「い、子だな、何しに來たのだ。」
「遊びに來たの、おちさん何なの。」
と、太郎が訊きました、怪物はニコニコ笑つてたちさ



んと云はれたのが嬉しかったのです、
「たちさんは雷さ。」
「あれ、雷さん。」
「あ、だが恐くはないよ。」
「何所から來たの。」
「やつぱり雲の中から。」
「たちさん、その太鼓は、なんにするの、ずい分大きいね。」
「これかい、これは雲の中を走ながら打つんだぜ、どんどんどんくつて打つと、ほら、ごろくくつて聞えるだ



らう。』

『面白いなア、おちさんの胸にある、そのピカピカして
るものは何。』

『これかい、こりや鏡さ、これを下へ向けて振るとピカ
く光るんだ、そら、雷さんの鳴るときにピカピカ雷光
がするだらう、あれはこの鏡を振るんだ。』

『面白いんだね、それから、おちさんの背負ってる袋は
何？。』

『これかい、こりや虎の皮の袋さ、雲袋つて言ふんだよ
この袋の口をあけると、黒雲が湧き出して、そこら中が

真暗になるんだぜ。』

『大變なんだね、黒雲が出ると風が吹くけれど、あれは
如何するの。』

『は、は、は、感心なことを訊くな、あれは羽團扇ご云ふ
ものがあつて、それで煽ぐのさ、さうすると冷たい風が
吹いて来て、雨がばらばらと降つて来るんだ、それから
此の如意の槌と云ふので、どんく木でも石でも叩いて
破壊して終ふのさ、この七つ道具でもつて、おちさんは
お日さまと喧嘩するんだ。』

と、大威張りで話して聞かせました、太郎さんは、太





鼓と、太鼓のばちと、鏡と、くも袋と、うちわと、如意の槌と、指を折つて數へて見ましたが、これでは六つしかありません、雷のおちさんは七つ道具だなんて自慢しながら、何だこれちや六個しかないちや無いかと思ひました、

「お叔さん、これちや六個しかないちやないか、七道具ちや無いや。」

「は、は、もうひとつ、い、のがあるんだが、見せられない。」

と、雷の小父さんは笑つてます、



太郎さんは頻りに首を傾けて考へてゐました、すると今まで黙つて訊いてゐた弟の次郎が、小さい頭をふり立て、突然に大聲で、

「お叔さん、お臍ちやないかい。」

と、云つたので、雷の小父さんは顔中口だらけにして笑ひ出しました、

「は、は、よく當てたな。」

と、腰につけてゐた大きな巾着を出して太郎と次郎の前にをきました、

「さあ、明けて見な。」



と、云ひますので、二人は一生懸命で明けやうと思ひましたが、なか／＼明きません、その時霧が晴れ渡つてお日様が顔を出しましたので、お日様と仲が悪くて七道具で喧嘩をすると云ふ、雷の小父さんは急に空を睨んで立ち上り、

「さあ、もう小父さんは歸らなくつちやならない、坊ちやんたちも御歸り。」

「左様なら、いろ／＼面白いお話を有り難う。」

と、太郎が云ふと次郎も、

「小父さん有りがと。」



「可愛い、子供よ、お父さんやお母さんの云ふことをよく訊きなさい、喧嘩したり、いたづらしたりすると、小父さんが来てお臍をとりあげるよ。」

と、云ひながらくも袋の口を少しあけると、むくくと黒くもが湧き出しました、雷の小父さんはそのくもにのつて、

「左様なら。」

と、天へ上つて終ひました、山の上の方で、ごろ／＼と鳴つてゐました。

一三 着物道楽

ある國に、大變着物道楽の王様がありました、澤山の
着物を造らせて、毎日々々着物を着かえて、馬で城下を
乗り廻して領分のものに褒められるのを、何よりの樂し
みにしてゐました、

ある時のことで、外國から不思議な織物師が二人渡つ
て來ました、この國の玉様が着物道楽だと云ふことを訊
いて、是非ひとつ御目にか、つて拵へてあげたいこのこ
とでした、その着物云ふのが、地質や模様はとび離れ



て立派だが、しかも心の曲つたものや、馬鹿ものや、自
分の仕事に不眞面目なものが見ると、地質も模様もさつ
ぱり目には見えぬと云ふことなのです、そう云つて織物
師が申上げるのを訊いて、家來のものがすぐにその事を
王様に申上げました、着物道楽の王様、どうしてこのこ
とをきゝにがしませう、すぐに織物師を召し寄せて、
『さう云ふ不思議の織物なら早速をつて呉れ、金はいか
ほど費つてもよい。』

との仰せでした、

織物師は承はつて、まづ原料として選ぬきの生糸と、



澤山のお金を頂戴して、新たに機械場を建て、大じかけの機械を二臺据えつけて、其の内に閉ぢこもつてをりはじめました、五六日経つと王様は、

『もうどの位、をれたらう、一度様子が見たいものだ。』と、思ひましたが、然し考へるご放心見に行く譯にも行かない、

『ましてしばし、これは唯の織物とは譯が異ふから、うつかり行つて見て、見えないものなら王様と云ふ身分に對しても恥かしい譯だ、さうだ、ひとつ家來をやつて試しに見やう。』



と、ろこで三太夫と言ふ家來をやつて、様子を見させました、三太夫は早速機械場へ行つて見ますと、二人の織物師は一生懸命になつて、ちやんくをつてるやうですが、三太夫の目には何にも見えません、

『こりや如何だ。』

と、驚いてゐると、二人の織物師は、ふりかへつて見て、

『如何で御座いませう、この模様は王様の御氣には召しませうまいか。』

と言ひました、然し、三太夫にはその模様が些とも見

えません、然し、見えないと言へば、自分は不忠者、馬鹿者、心の曲つた者と思はれるのだ、こりや大變だと思ひましたから、

「いや〜大層御立派だ、至極結構だ、きつと王様の御氣に召すだらう。」

と、宜ひ加減のことを言ひました、すると、織物師は變に、顔を見合はせてゐましたが、やがて眞面目になつて、

「この横糸は紫に紅の交りで、たて糸は青に黄で御座います、その間へ白をちよいく交せてをります、まつ五



色の糸の交をりですから、まづ世界にこれほど立派な織物は御座いますまい。」

と、一々機織を指さして説明して聞かせますが、三太夫には何が何だかさつぱり分りません、とにかくその言葉だけは覺えて歸りました、待ち詫びてゐた王様は三太夫を見るとすぐに、

「どうちや織物は大分出來上つたらうな。」

「はい左様で御座います、五色の糸のまぜをりで世界に又とない織物で御座います、至極、立派な、上等な……。」





重 謠
着 物 運 送
表面ばかり
断つて
心がキレイで
無いならば
少しも立派に
見えぬから
本物の着物に
劣ります

三 郎 作



着物運送

と、織物師の言つた通りに申上げました、
 さいて見ると、大分上等らしい織物ですから、王様は
 もう待ち遠しくつて堪りません、毎日々々、家來の者を
 やつて様子を見させました、誰が見ても織物は些とも見
 えませんが、然し、見えないなど、言ふと、云ふと、不忠
 者、馬鹿者、心の曲つたものと思はれてはたまらないの
 で、誰でも見えないと云ふものはありません、織物師の
 説明を訊いて、歸つて來ると、その通りに言上しまし
 た、

さて、二十日ばかり経つと、織物が出來ました、織物



表面ばかり
飾アさつて
心がキレイで
無いならば
少しも立派に
見えぬから
木綿の着物に
劣ります

重 謠
着 物 趣 業

順三郎作



着物道楽

と、織物師の言つた通りに申上げました、
きいて見ると、大分上等らしい織物ですから、王様は
もう待ち遠しくつて堪りません、毎日々々、家來の者を
やつて様子を見させました、誰が見ても織物は些とも見
えませんが、然し、見えないなど、言ふと、云ふと、不忠
者、馬鹿者、心の曲つたものと思はれてはたまらないの
で、誰でも見えないと云ふものはありません、織物師の
説明を訊いて、歸つて來ると、その通りに言上しまし
た、

さて、二十日ばかり経つと、織物が出來ました、織物



師は王様の着物の着丈をはかつて、ちやんこ着物に仕立てる言つて御前を下りました、それでいよく、吉日を選んで王様にさしあげることになりました、いよくその日が來ました、家來のものは残らず大廣間に出て、左右に綺麗に星の如く居並びました、王様は正面に厳めしく座つてゐます、やがて織物師は白木の臺を捧げ、しづくくと御前に出て、

「恐れながら、御前への召物、これに拵らへて参りました。」

と、言つて、白木の臺の上に戴せたのを、開いて御目



にかけるやうな様子をしませんが、どうも見えません、誰にも見えないのです、王様はチョツト變に思ひましたけれども、考へて見れば自分も少しは曲つたことをしてある、自分の役目を疎かにした事もある、そのせいで見えないのかも知れぬと思ひましたから、わざと感心した様子をして、

『やア、見事々々、どうも立派な出来だ。』

と、褒めました、いよくその着物を御着用と言ふことに成りました、織物師は、

『はい、これが御襦袢で御座います、是が御下着で御座



います、これが御上着で御座います、よく御似合申します。』

と、言ひく、王様にさせかけましたが、やつぱり王様にも家來の者にも見えません、家來の中には、

『まことに怪しいことだ、こんな不都合なことがあるものか。』

と、思ふ者が無いでもありませんでしたが、然し見えないと言へば、不忠者、馬鹿者呼ばりをされますからわざと、

『御立派で御座います、よく御似合申しますと、口々に

褒めました、

王様は何だか可笑しいと思ひました、どうも裸であるやうな氣持がしました、然し、織物師からは、

「さあ、立派に御召しになりました。」

と言はれ、家來の者からは口々に褒められたものですから、それに釣り込まれて、とう／＼立派に着飾つてゐるつもりになりました、そこで織物師には澤山の御褒美をやりました、

「これから、御領分内を歩つて、百姓や町人にこの立派な着物を見せてやらうと云ふので、馬に乗つて家來を五



六十人つれてお出かけになりました、領分の百姓や商人は、この着物のことが早くから大評判でしたから、どんな立派なものだらう、それを拜みたいものだと言ふので見物が何萬人と言ふ程集つて、黒山のやうに出かけて待つてゐます、やがてそのうちに、王様は馬に跨り、家來を五六十人も連れて靜かに練つて來ました、然し誰にも立派な着物は見れません、

「こりやおかしい、然し、私は悪人なのかも知れない、不正直なのかも知れない。」

と思ふ者もありました、けれども、誰も見えないなど



は申しません、

『あゝ立派な御召物だ。』

『中々結構な着物だ。』

『實にお珍らしい品ぢやありませんか。』

など、口々にでたらめを言つてゐました、誰も悪人と思はれたり、馬鹿者と思はれるのが厭だつたのでせう何れも感心したらしい顔をして、高慢ちきなことを言つてゐます、

するご、此の時子供が五六人飛んで來ました、珍らしい王様の御通を見て居りましたが、



『やあ、變だなア、王様は裸體だぜ。』

『これはへんだよ。』

『みんなごらんよと。』

『やあい、可笑しいなア、裸體で、御馬に乗つてらア

.....。』

『可笑しなア。』

『よつぼどめうだよ。』

と、聲を揃へて騒ぎたてました、

子供はしやうちきな者で悪人と思はれたら困るの、不忠者と呼れちや叶はないのと、そんなことは考へません





見た通り有の儘に裸體だと言つてしまつたのです、子供の言葉を訊いて、はじめて自分たちが高慢ちきなことを言つてほめてゐたのが恥しくなりました、

「いかにも王様は裸體だ。」

と、一人がいひますと。となりの者も、

「本當に丸裸だ。」

「ほんとうとうだ。」

と言つたので、五六萬の人々が一度にわつと騒ぎたてました、

王様も家來もはじめて氣がつかしました、逃げるやうに



して御殿へ歸りましたが、此の時はもう織物師は何所へ行つたか影も形も見えませんでした、其後王様の着物道楽はやめました、此の國の百姓も商人も、餘りいゝ着物なぞきてあるく者はなくなりました。

一四 象の仇討

ある印度人の家に、一匹の大きな象が飼つてありました、此の象は大層よく家の者に馴れてゐましたから、毎日自由に家の中を遊び廻り、食事の時には、みんなの食べ残りを貰つて食べてゐました、



ある日のここでした、この印度人の家に宴會がありました、澤山のお客様が食卓について、御馳走を食べて居りました、すると例の象がのつそりく入つて来て、長い鼻を客の前へ出しました、然し、そのお客は、この象のことをよく知りませんでしたから、

『これく、彼方へ行け。』

と、言つた儘、何も食べものをやりませんでした、そして持つてゐた肉又で、鼻の先をちくりと一つ突きました、

象はびつくりしましたが澄し込んで傍の客の所へ行



つて食ものを貰つて食べました、

しばらく経つと、象は靜かに庭の方へ行きましたが、間もなく木の枝を折つて来て、先刻フォークで突いたお客様の頭の上で振りました、その木の枝には小さいくろい蟻が澤山ゐましたから堪りません、髪の毛から襟首から身體中何所となく蟻が這ひ込みました、お客はびつくりして身ぶるひするやら、とびまわるやら、大さわぎをしました、やつとの事で逃げ出して湯殿へ入つて着物を脱いで洗ひました、それ以來、この象に悪戯をするものはなくなりました、

この象がある裁縫師の家の前を通りました、するとその裁縫師が、よせばよいのに、

『こら、邪魔になるな。』

と言ひながら、象の鼻先を縫針で突きました。

象はびつくりして鼻をまきあげました、その様子が面白かつたので、裁縫師は手を打つて笑ひました。

『はゝゝゝ、面白い、あんな大きな象がこんな小ぼけな針のために苦しむんだから、世の中つて面白いもんだなはゝゝゝ。』

と、またその針で突かうとしました。



すると、象はひよいと鼻かひるがへしてその儘裁縫師の店頭をたち去りましたが、間もなく、水溜のところへ行つて、泥水を一ぱい汲み込んで、また裁縫師の店頭へ戻つて來ました。

『はゝゝゝ、また針の御馳走が欲しくつてやつて來たのかい。』

と、笑ひながら裁縫師が、縫針を出しますと、こはいかに、鼻を延ばして裁縫師の頭から泥水を吹きかけたので、裁縫師は顔から身體から泥だらけになつてしまひました。



「わッ、大變だ、助けてくれ。」
と、轉りまわつて騒ぎました、家内中泥の海になりました。



狐の恩返し終

大正十年十月二十日印刷
大正十年十一月十日發行

【定價五十錢送料四錢】

著 者 初 島 順 三 郎

發 行 者 東 京 市 淺 草 區 瓦 町 二 十 四 番 地
中 村 惣 次 郎

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 豐 島 町 三 十 四 番 地
小 笠 原 幸 吉

發 行 所 東 京 市 淺 草 區 瓦 町 二 十 四 番 地
中 村 書 店

(電話下谷四九三一番)
振替東京一一六一六番)

重 話 新 集
狐 の 恩 返 し

童話新集

定價一冊金五十錢
送料一冊金四錢

第 一 編	第 二 編	第 三 編	第 四 編	第 五 編	第 六 編	第 七 編	第 八 編
狐 の 恩 返 し	銀 色 の 小 鳥	小 猫 大 盡	鶏 の 時 計	山 羊 の お 母 さ ん	蛙 の 王 様	猿 の 醫 者 様	鴉 の お 詫 び

505
8

119.23

終